

第3学年「国語」学習指導案

授業者 森 壽彦

2月21日（土） 1階多目的室 9:00～9:40（話し合い:2階プレイルーム11:00～11:45）

1 単元名 「なぜ？」を深ぼり～もしいろいろ語り手として民話を読んだら～

2 単元について

単元目標	・民話特有の構造や展開を捉え、語り手以外の視点でことばに立ち止まりながら読む。 ・他者と考えを共有することによって、さらに民話と向き合おうとしている。
------	--

本学年の子どもたちは、他者とのわかちあいをもとにことばへの感度を高めることを目指してきた。教室内コミュニケーションを充実したものにしていくために求められるのが他者とのかかわりの深化だと考える。他者とのかかわりを深化させていくために3年生として大切にしてきたのが「共感性」である。「共感性」を育むために他者との違いを否定することなく、違いがあることを受け入れる。さらに、他者との比較を通して違いを感じたり、違いの中から共通点を見出したりすることを楽しむことを意識してきた。「ことばの感度」からの気づきを共有し、共感し合うことはことばに関する理解も深まる。子どもたちは4月からそれぞれの経験を持ちよることを通して、ことばに対して吟味し合うことを積み重ねてきた。その積み重ねが、他者と考えを比較する中で違いを認めつつも違いの中にある共通点や類似点を見出し、ことばを見つめる姿につながったと考えている。年間のカリキュラムを通して材とのかかわり、他者とのかかわりを深めていくことで一人ひとりの「ことばの感度」を高めようとしている。

物語の学びの中で読む際の視点が異なることで読後感が変化してしまうことに気づいた12月。「ちいちゃんのかげおくり」では「読後感のひみつは？」を問いとし、ことばをもとに戦争が激しかった時代の場合の様子を想像したり、その環境の中で生きた登場人物の気持ちを具体的に想像したりした。その想像を他者と共有し合うことで読後感の源泉となるものを探った。探る中で互いの考えのズレから、登場人物に寄り添って読む場合と物語全体を俯瞰して読む場合とで読後感が異なることに気づいた。

視点による読後感の違いを実感したある子がNHK for schoolの「昔話法廷」に興味をもち、授業で行いたいと提案した。そのことばをもとに単元化した。子どもたちは、既知の昔話を登場人物の視点から出来事を捉え直すことを楽しんだ。単元の終末、民話（昔話・神話・伝説も含め）への見方が変わった子どもたちは、他の作品にも興味を示した。この子どもたちの興味関心を出発点とし、本単元を構想する。民話は口承文学である。そのため、語り手の解釈が物語の構造や展開に影響を与えてしまう。そこに疑問をもち、子どもたち自身が語り手であればどう語るのかという視点で民話を読む。すると、語り手の解釈に立ち止まり、登場人物の性格や気持ちの変化について自身の既存の知識や経験と結びつけて読むこととなる。そして、今まで疑いもなく読み進めてきた民話に対して問いをもつ姿につながるだろう。問いをもとに読むことを通して、他者との考えの共有から自分にはない新しい読みの視点を見出し、語り手として民話と向き合おうとするはずだ。この姿を本単元における「関係性の中から生成される主体」と考える。それを支えるのが「ことばの感度」である。今までとは違った視点から民話と向き合い、語り方を検討することが「ことばの感度」を高めることに機能すると期待している。

3 学習指導計画（9時間目／全15時間）

第1次 民話の語り手による解釈の違いについて気づく	…2時間
第2次 民話に対する問いについて考える	…本時6/8時間
第3次 民話を語り手となって再話する	…5時間

4 本時の学習について

（1）本時のねらい

- ・民話に対する問いについて自分と他者の考えを共有することでさらに読み返そうとする。

（2）予想される本時の展開

主な学習活動と子どもの姿	留意点
1. 問いについて話し合う。 2. 話し合ったことをもとにふり返る。	・行動や言葉から登場人物の性格など人柄について読む。 ・子どもたち一人ひとりの経験（直接経験や読書経験など）をもとに考えを話し合えるようにしたい。 ・話し合ったことをもとに読み返し、再考につなげる。 ・話し合いが広がるような場合は、読み返す時間を次時に設けるようにし、考えを共有し合う時間を大切にする。

□授業後の話し合いで話題にしたいこと

他者と考えを共有することで、民話を読み返し、問いについて再考することにつながったか。